

## 「グローバル・キャンパス構想」（第1次中期計画）の総括<sup>1</sup>

### 1. 「グローバル・キャンパス構想」の趣旨と実行計画

2015年度に(財)日本高等教育評価機構へ提出した「自己点検評価報告書」には、

今までは年度ごとの事業計画書、事業報告書において短期目標を立てていたが、大学創立50周年を迎えるにあたり、学長を中心として中期計画の策定を行っている。

2015年度の企画運営委員会、常務理事会で学長から提出された基本方針が認められた。そこで示された内容は、「建学の精神の中核的価値観を変化させず」に「小規模ながらグローバルな大学を目指す」というものであった。

とある<sup>2</sup>。この基本方針をもとにして、2017年3月19日の学校法人八代学院理事会で「グローバル・キャンパス構想」が決定され、その具現化を目指す事業計画（第1期：2017～2021年度）が動き始めた。したがって、神戸国際大学（以下、本学と略す）において、この「グローバル・キャンパス構想」こそが本格的な中期計画の最初であると言えよう。

2017年4月よりスタートした「グローバル・キャンパス構想」の趣旨は、「小さいながらも、グローバルな大学」を目指す事業を推進することであり、以下の5項目を主要な目的としている。

- ①建学の精神の具現化
- ②海外協定校との相互利益
- ③日本人学生獲得
- ④財務バランスの改善維持
- ⑤教育研究振興のための施設設備の充実

上記の目的を達成するため、まず、海外協定校との間にキャンパス間の垣根を越えた密なネットワークを構築する（次頁の構想概念図参照）。このネットワークを、総体として「グローバル・キャンパス」と呼称し、本構想の名に冠する。本学と海外協定校は、グローバル・キャンパス内の行き来・人的交流を通して、グローバル社会において有為な人材を育成することができる。

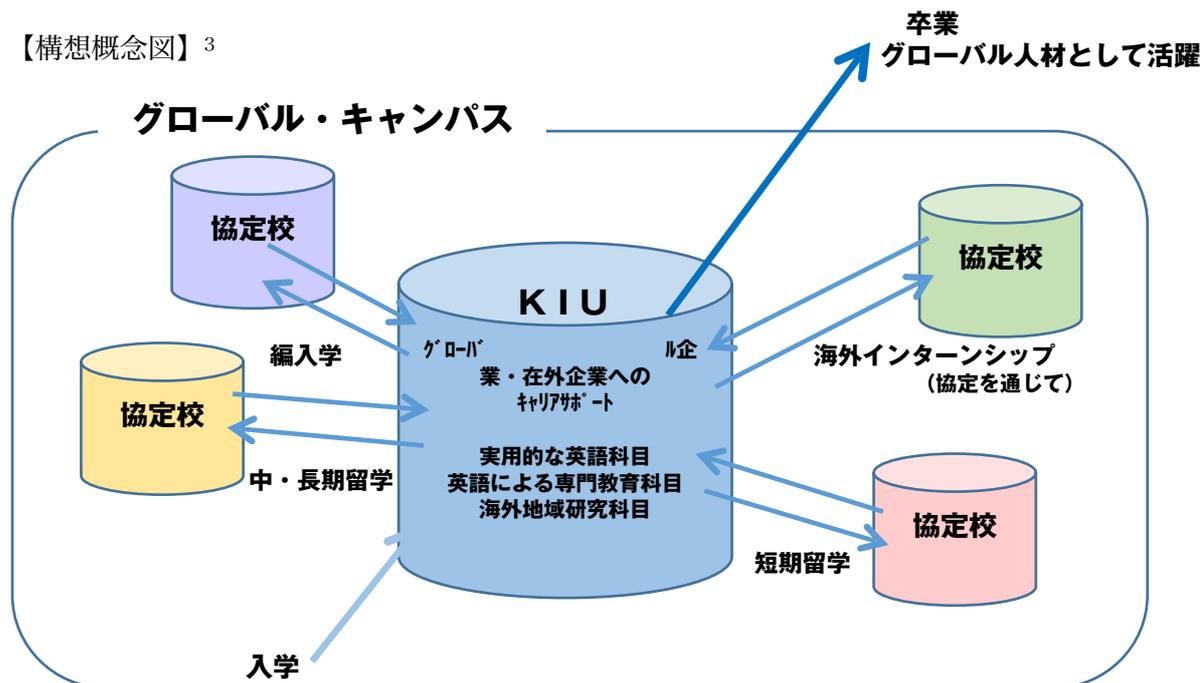
また、本学の日本人学生は短・長期の留学制度を利用して、在学中に海外の複数のキャンパスでのグローバル教育（文化、言語、海外インターンシップなどを含む）を受けることが可能である。すなわち、「グローバル・キャンパス構想」の下では、小規模大学である本学が各種教育プログラムを通して海外協定校と結びつくことで、中規模以上の大学に匹敵するキャンパスを持ち得る。そして、本制度を学生募集広報の全面に押し出し、日本人学生の獲得の一助とする。

---

<sup>1</sup> 本中期計画は、2017年から2021年の5カ年を対象とするが、2020年には新型コロナウイルスの勃発や学長の交代があった。このような事情から、本総括は中期計画の2017-2019年を対象とし、2020年3月に作成された中間報告と2022年度11月の認証評価に基づいている。教員の5カ年間活動報告および各部署の自己評価は、管理運営センターにて閲覧に供している。

<sup>2</sup> 「2015年度 神戸国際大学自己点検評価報告書」 p.16

【構想概念図】<sup>3</sup>



海外提携校とのネットワーク構築の前提として、本学自体がハード・ソフト両面で、相応レベルまで国際化・グローバル化する必要がある。そこで、「国際化・グローバル化しているか」という観点から、学内諸活動の総点検を行うこととした。2017年度に約100項目に渡るチェックリストを作成し、一旦点検を行った上で、各項目に対応する実行計画を策定した。また、それぞれの項目に数値目標を設け、定期的に点検・評価を行うこととした。

なお、全項目の進捗状況は（達成率）は以下の通り

約53% 2018年2月時点

約75% 2019年5月30日時点

## 2. 外部評価委員会による中間報告

上でも述べたように、「グローバル・キャンパス構想」は定期的に点検・評価を行うことになっており、外部評価委員会<sup>4</sup>が組織され2018年2月に第1回目の会合が開催された。以降、2018年10月6日、2019年6月8日、2019年11月9日と累計4回の委員会が開催され、事業計画の進捗状況等の意見交換を行った。また、本学の日本人学生や留学生との面談、学生によるプレゼンテーションも実施した。さらに、中間報告書の作成に向けてのビジョン共有のための議論や提言等の議論や意見交換を行った。

折しも2019年末から新型コロナウイルス感染症が発生し、2020年1月には日本でも感染が

<sup>3</sup> 「グローバル・キャンパス構想」事業計画（2017年3月17日：理事会資料）p. 2

<sup>4</sup> 委員会のメンバーは、佐藤賢一氏（京都産業大学：委員長）、児玉英明氏（滋賀大学）、小西尚美氏（関西学院大学）、佐藤信行氏（中央大学）2018年2月時点

確認された。2月末には小・中・高校の一斉休校が指示され、4月には緊急事態宣言が発出されるなど、2019年度末の学校現場は混乱の最中にあった。中間報告書の作成に向けての会合もままならない中、各委員からの意見や提言を集約するという形で、2020年3月13日に外部評価委員会から中間報告書が提出された。

「小さいながらも、グローバルな大学」を目指すという「グローバル・キャンパス構想」の基本理念は、すべての委員から好意的に評価された。それを踏まえたうえで、各委員から建設的な意見や提言をいただいた。佐藤賢一委員長から、FDとSDと学生が有機的に結びついてよりよい学びの検討の機会と場がうみだすこと、学内はもちろんのこと学外の関係者との意見交換や調査を行うことを提言していただいた。佐藤信行氏から、「グローバル・キャンパス構想」におけるリハビリテーション学部の位置づけ、海外協定校との相互利益の一層の充実等の提言をいただいた。また、児玉英明氏からは、退学率や卒業率、正規雇用率といった新しく公開されている評価指標に対して、本学がどのように対応し取り組んでいくべきか貴重なアドバイスがあった。小西尚美氏より、「グローバル・キャンパス構想」の特徴、キャリアとのつながり、カリキュラムとの関連、質保証など外部へ積極的に発信していく必要性について提言をいただいた。本学にとって大変貴重な財産となった。なお提言の詳しい内容は、「神戸国際大学グローバル・キャンパス構想 外部評価委員会中間報告書」（2020年3月13日）に掲載されている。また、本学の国際交流の活動は、私立大学の中では昨年に続き2年連続第30位にランクされている<sup>5</sup>。

### 3.中間報告以降の取り組み

日本においては、最初の新型コロナウイルスの感染者が2020年1月15日に確認された後、3月中旬から感染源不明の感染者が散発的に発生した。日本政府は2月28日、全国すべての小中学校や高校などに対して、3月2日から春休みに入るまで臨時休校とするよう各都道府県の教育委員会などを通じて要請した。また、3月9日から海外からの渡航者に対して、入国制限の強化が行われた。諸外国も同様の措置をとっているため、留学の派遣や受け入れが不可能となった。

さらに3月下旬には、主に都市部において新型コロナウイルス感染症の集団発生（クラスター）が報告され、感染者数は急増した。4月7日には兵庫県を含む7都府県に対して、4月16日には全都道府県を対象に、「緊急事態宣言」が発出された。このため、本学も2019年度の卒業式と2020年度の入学式を取りやめた。また、2020年度前期は、学生・教職員等の校内立ち入り禁止の措置を講じ、対面授業を停止して遠隔授業を実施することとなった。実施のための準備期間を経て、5月の連休明けから遠隔による授業を実施した。2020年度後期以降は、対面授業と遠隔授業を並行して実施している。

このような状況の中で、グローバル・キャンパス構想実現のための事業実施も、停滞することとなってしまった。2020年度は海外研修や交換留学の派遣、提携校からの留学や日本語研修の受け入れを停止した。2021年度もこの措置は継続しており、2022年度については検討中である。コロナ禍により中止を余儀なくされた海外派遣プログラムに代えて、オンラインでグローバルな学びを体験できるバーチャルツアー、オンライン英会話、バー

<sup>5</sup> 週刊東洋経済「本当に強い大学—総合ランキング」の国際分野（2021年5月）

チャル留学を含むグローバル・キャンパス体験プログラムを企画実施している。リハビリテーション学部の学生に対しても、二つの海外研修プログラムが用意されている。

2021年度現在、学術交流協定を結ぶ大学は13か国62大学に上り、共同研究、教員交流、学生交流、各種情報交換が行われている。留学生が日本人学生とともに学ぶ国際大学を目指すという目標のもと、2021年5月1日現在、主としてアジア12か国から国際別科生18人を含む計496人の留学生を受入れている。留学生支援の主なものとして、留学生向けの科目の設置、寮の対応や日本文化サークルの設立、授業料減免、キャリアガイダンスを実施している。特に、大学院進学プログラムは組織的に実施され、例年一定数の大学院合格者が輩出する成果を挙げている。また、コロナ禍においても、「日本語プログラム」や学生間交流などをオンラインで継続したほか、ビザ更新の申請支援、オリエンテーションの動画配信、秋入学式や学位授与式をハイブリッド形式で実施した。今後は欧米諸国への海外協定校の拡充、海外研究者との共同研究の更なる活性化及び国際交流教育における学びの質的転換を図ることを計画している。

#### 4.今後の課題

2020年度以降、コロナ禍がグローバル・キャンパス構想の取り組みに大きく影響してしまったが、グローバル・キャンパス構想の総括として、以下の点を本学の課題として考えている<sup>6</sup>。

##### (1) 国際交流の規模から質への転換

これまでは主に海外協定大学を量的に拡大する戦略がとられてきたが、海外協定大学としてはアジア諸国が多くなっている。留学生もその地域からが最も多い。多様な国の留学生が本学に学びに来ることが望まれる。他方、本学から留学する先としては、英語圏の大学が圧倒的に多い。アジア諸国への留学も増加させることが必要である。

##### (2) 協定大学との研究交流の促進

本学の国際交流の特徴が、学生の交流が中心となっている。教員の交流、特に研究交流の一層の活発化が望まれる。海外の研究者を招へいし、共同研究を行うこと、協定大学との研究上の関係を強化することである。60校以上の海外協定大学をもつ本学は、まずこれらの大学と研究上のネットワークを構築し、アジアの大学、さらには世界の大学との研究ネットワークのハブとなることが求められる。

##### (3) 国際化と内部質保証

様々な国際的活動が、本学の教育や研究といった教育の質保証とどう関連しているのか、これらを検証する必要がある。単なる大学のブランド化に貢献するだけでなく、学生の学びの質の向上につなげる必要がある。

<sup>6</sup> 『令和3年度 大学機関別認証評価 自己点検評価書』p. 90